
煮え切らない話

檜 楓呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

煮え切らない話

【Nコード】

N2490V

【作者名】

檜 楓呂

【あらすじ】

ある（バ）カップルの煮え切らないお話。

(前書き)

「そういう話」の続きのなのです。誰かの僅かな時間潰しにでもなれば幸せです。

「暇ねえ」

「暇だなあ」

「何かやる事ないの、慎」

「やる事あったってな、あずさ。もうゲームは飽きたって言ってただろ？」

「あんたの部屋にはゲームしかない訳？ それに飽きたっていうか、慎の攻め方がいやらし過ぎるのよ」

「いやいや、野球の基本はバント戦術だと思うんだ、俺は」

「度合いがあるのよ。もう愛工大名電にでも転校したら？ って言いたい位にバントばかりじゃないの」

「愛工大名電って、またそんなマニアックなネタを……。つか、たまにはバスターもするぞ？」

「そういうところがいやらしいのよ。そんなじゃ女の子にモテないわよ？」

「いーよ別に。あずさにモテてれば」

「……あっそ」

「……………」

「……………」

「暇だなあ」

「暇ねえ」

「どっか出かける？」

「もう夜の十時よ？ どこに行くってのよ」

「あー、コンビニとか？」

「行ってもどうしようもないでしょ。立ち読みは店員さんの神経を逆撫でするだけよ」

「流石、コンビニアルバイターは着眼点が違うな」

「それは褒めているのかしら」

「ん、どうだろ……」

「煮え切らないわね。自分の発言には自信を持ちなさいよ」

「じゃあ褒めてる。あずささんマジ店員の鑑。愛してる」

「ありがとう」

「どういたしまして」

「……………」

「……………」

「暇ねえ」

「暇だなあ」

「最近、何か面白い事なかった？」

「うーん……ああ、アレだ。この前軽く山梨までツーリングしてたら、プロ野球のマスコットの痛車三台とすれ違った」

「へえ、それはまたマニアックね。それ、いつの話？」

「三ヶ月前」

「三ヶ月前は最近に入るのかしら？」

「個人的には……入らないんじゃないかな」

「じゃあ私と慎が付き合ったのは？」

「八ヶ月と十八日前。あー、そう思うと随分最近に感じるなあ」

「奇遇ね、私も最近に感じたわ。実際にはそれよりもっと前からあなたにアタックしてた訳だけど」

「いや、悪かったって。そういう話だって素で気付かなかったんだよ」

「知ってる。けど腑には落ちないわ」

「水に流してもらえると嬉しいッス」

「どうしようかしら。乙女心を焦がした責任って大分重いと思うのよね」

「あずさ、愛してる」

「知ってる」

「あずさは？」

「好きよ」

「じゃあいいだろ？」

「どういいのよ。……ま、いいけど」

「……………」

「……………」

「暇だなあ」

「暇ねえ」

「そういえば、さっきから思ってたんだけどさ、寒くね？」

「そうかしら？」

「ああ。エアコン、効きすぎな気がする」

「28℃よ？」

「や、それでもなんか寒いような……」

「ふーん」

「って、言いつつ何で抱きついてくる？」

「寒いんでしょ？」

「寒いけど」

「ならいいじゃない」

「あいやー、いいんだけど良くないっていうか」

「何がどう良くないのかしら？」

「それはアレだ、男の純情とかそういうの」

「ふーん」

「で、離れる気は？」

「ないけど？」

「さいですか。……まあいいけどさ」

「……………」

「……………」

「暇ねえ」

「暇だなあ」

「何かしたい事ないの、慎」

「んや、特になんもないかなあ」

「本当に？」

「なんかすごく疑わしそうな目だな……」

「んー、ムツツリスケベなあんたの事だから――」

「誰がムツツリスケベか」

「――てつきり、」

「無視ですか……」

「あのタンスの中にあるモノみたいな事をされるものだと思ってたわ」

「……何を指さしてるですか？」

「タンス。詳しく言うと、上から三番目の引き出しの奥深くの洋服じゃないモノ」

「あ、アハハ、何ヲ言うデスカ、あずさサン。タンスノ中にハ、洋服シカないデスよ？」

「ええ、アレもまあ洋服の本とかでしょうね。何たってコスプー」

「ストップ、いけない、それ以上はいけません」

「じゃあ私の唇をふさいだら？」

「い、いや、そういうアレじゃなくて、だな……」

「それとも、やる事もないし、口封じにそういうの……する？」

「……………」

「……………」

「……顔、真っ赤だぞ、あずさ」

「そーいう慎こそ、心臓バクバクじゃない」

「……………」

「……………」

「……暇、だなあ」

「……暇、ねえ」

……それは蒸し暑く、煮え切らない夏の夜のこと。

（後書き）

全体的に本当に色々な意味で煮え切っていないですが、こんな（バ）カップルがいたらいいなって思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2490v/>

煮え切らない話

2011年10月5日12時11分発行